べっぷの文化財

No. 17
昭和61年2月

―― 別府の植物 ――

- 環境を代表する植物たち
- 顔なじみの植物たち
- 新メンバーの植物たち
- 姿を消した植物たち

関の江海岸の砂丘に群生していたコウボウムギ

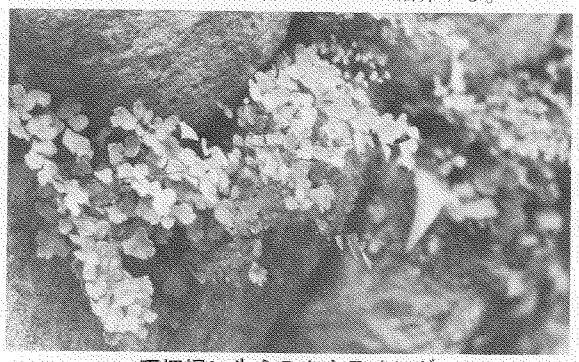
別府市教育委員会
別府市文化財調査員会

環境を代表する植物たち

別府は由布岳山頂1584mから海岸の汀まで、地形や地質、水分や温度条件などの違いがあって、特徴的な環境をもつ自然に富んでいる。

そこには、その環境に適した植物が生育して、森や林、草原や湿地といった特有の景観をつくり、自然の豊かな別府のイメージづくりの一翼をになっている。

その環境を代表する植物のいくつか紹介する。



石垣塀に生えるホウライシダ

〈塩湿地〉

シオクグ　（カヤツリグサ科）

Carex scabrifolia Steud.

海岸近くの塩水の出入する泥地に生育する多年草。長い地下茎をもっていてしばしば群生する。地上の茎は高さ30～50cmで、夏の初め堅い実をつける。北海道から沖縄にかけて分布するが、別府市では関の江海岸の入江にわずかに生育するにすぎない。

〈砂丘〉

コウボウムギ　（カヤツリグサ科）

Carex kobomugi Ohwi

海辺の砂地に生育する多年草。根茎はやや太く、砂の中に長く伸びる。茎は高さ10～20cmで太く、春に大形の花穂をつける。砂浜ではコウボウシバなどと砂浜の盛りあがった部分に大群落をつくり、砂の移動を防いでいる。和名は“弘法麦”の意であるが、茎の基部の古い部分の繊維が筆状になっていて弘法大師の筆にちなんでいる。麦は穂の形が似ていることによるが、実は堅くて食用にはならない。もっとも、ムギとはいってもムギの仲間（イネ科）ではなくてカヤツリグサの仲間である。関の江海岸の砂丘に群落をつくっていた。

〈砂礫地〉

ハマウド　（セリ科）

Angellca japonica A. Gray

海岸の砂礫地に生育する大形の多年草。茎は太く高さは2mほどになる。葉は大形で表面には光沢があって、夏に白い落下傘状の白い花を咲かせる。浜ウドの意で、関東以西から沖縄にかけての海岸部に分布する。別府では上人ヶ浜と観光港の一隅に今なお生育が認められる。

〈湧水池〉

ハンノキ　（カバノキ科）

Alnus japonica Steud.

湧水のある湿地に生育する落葉広葉高木。早春に、葉に先だって開花し、雌雄同株。雄花序は開花時に尾状に垂れ、花粉を風に飛ばす。雌花序は雄花序のすぐ下につき球形をしている。北海道、東北地方には一般的であるが、九州の産地は稀で、霧島山ろくが自生南限地となっている。別府では上人ヶ浜の湧水地帯に樹林をつくっている。幹はまっすぐに伸び、樹皮はタンニンの原料とり、材はエンピツ材、建具などに利用される。

上人ヶ浜湿地に群生するハンノキ

〈渓谷〉

シロヤマゼンマイ　（ゼンマイ科）

Osmunda banksiaefolia Kuhn

渓谷のがけに生育するシダ植物。鹿児島市の城山で発見されたのでこの名があり、紀伊半島以南の暖地に分布している。別府では河内渓谷の岩壁に群生し、渓谷の幽玄さを引き立てている。大分県内唯一の産地となっている。

河内渓谷に生えるシロヤマゼンマイ

〈市街地の石垣塀〉

ホウライシダ　（イノモトソウ科）

Adiantum capillus-veneris L.

水のしみ出るような岩のすき間や、海岸の崖地に自生するが、別府市内では市街地に逸出し石垣塀や測溝のすき間に群生している。草丈は10～25cmで常緑性であるが乾燥や低温にあうと地上部は枯れる。若草色の美しい小さな葉は扇形をしていて観葉植物としての価値もある。園芸店頭に見られるアジアンタムは、この仲間であって、熱帯地方からもちこまれたものもある。

〈温泉噴気孔〉

ツクシテンツキ　（カヤツリグサ科）

Fimbristylis tashiroana Ohwi

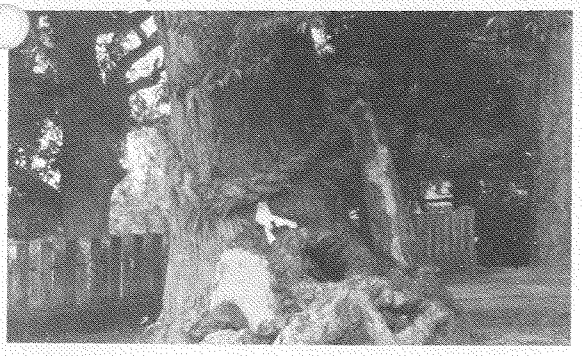
坊主地獄、照湯、明ばん温泉の湯の花小屋の周辺など噴気孔付近に生育する越年草、テンツキの仲間で和名は筑紫（九州北部）に分布する“点突”の意で、“点突”は先のとがった花穂の形からつけられたものであろう。分布は九州の火山地帯に限られている。

〈鎮守の森〉

イチイガシ　（ブナ科）

Querucus gilva Blume

低地の林内に生育する常緑広葉高木。スダジイやクスノキなどと共に鎮守の森をつくり、神のやどる神域を護ってきた樹木である。成長して巨樹となり樹高30m、幹囲3mに達するものもある。鶴見権現社は樹林として、竈門八幡社は木立ちとしてすぐれたイチイガシが生育している。晩秋に大きな堅果をつけ、昔はこの実を拾って食用にしていた。別府ではイッチー又はイッチーノキと呼ばれていた。



かまど八幡社のイチイガシ

〈火山山腹〉

クマシデ　（カバノキ科）

Carpinus Japonica Blume

低山地、特に火山地帯の林内に生育する落葉広葉高木。由布・鶴見火山群の自然林を代表する樹木で、樹高10～15mになり、新葉の出る5月ごろ、小枝に尾状の花穂をつける。葉は重鋸歯で基部が左右不同の心臓形になるのが特徴的である。この仲間にイヌシデ、アカシデがありいずれも幹に白いたてじまがある。また、材がかたく炭の原料として利用されていた。大分県にはシデ類を総称したソヤまたはソロという方言がある。

〈高原〉

ヒゴタイ　（キク科）

Echinops setifer Iljin

火山性草原に生育する多年草。8～9月、高原に秋風が吹きはじめると、ススキ草原の中に点々とイガグリの形をした青紫色の花が目につくようになる。これがヒゴタイの花で、葉はアザミのようにとげがあって厚く、裏はくも毛で白い。かつて、氷河期のころ日本列島が陸続きとなった時代に東シナ海を経て日本に渡来したとされている。したがって、日本では九州の火山地帯に最も多く分布し、その他は愛知県の一部や中国・四国地方のごく限られた範囲にしかない。

別府では、盆花に用いられてきた。花の美しさは華道からも注目され、ルリ玉などの名で利用されている。

奥別府の高原に咲くルリ玉のヒゴタイ

〈高原の湿原〉

サクラソウ　（サクラソウ科）

Primula sieboldii E. Morr.

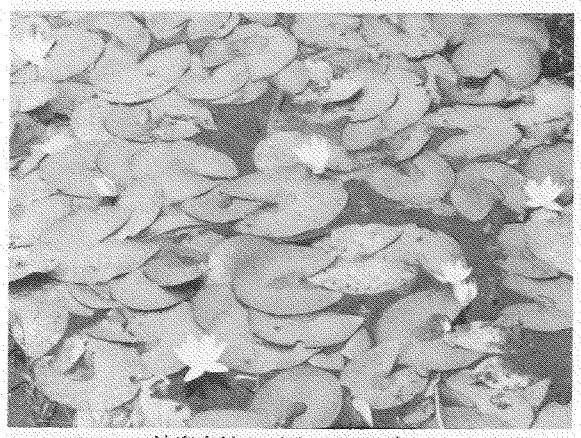
日当りのよい湿ったところに生育する多年草。サクラの花に似ているのでこの名があるが、花弁の先は浅く切れ込んでいるものの、もとの部分はくっついて筒状になり、合弁花類である。サクラは花弁が一枚一枚離れる離弁花類で分類学的に異なっている。北海道南部から九州中部にかけて分布し、別府では、猪の瀬戸湿原に生育する。花色はピンクが一般的であるが、時に白花品もある。花が可憐なことから多くの園芸種がつくられ、日本サクラソウの名で愛賞されている。

〈池沼〉

ヒツジグサ　（スイレン科）

Nymphaea tetragona Georgi

池沼に生育する多年草。太い地下茎をもち、夏に白い花を水面上に咲かせる。ヒツジグサの名は未(ひつじ)の刻（午後2時）に開花するところからきている。別府では神楽女池に自生している。スイレン（睡蓮）は漢名で、この仲間の総称として用いる場合が多い。花が美しく黄色や紅色の園芸種を庭先で見かけることがあるが、これらはヒツジグサとは別種の洋スイレンである。



神楽女池に咲くヒツジグサ

〈岩場〉

ゲンカイツツジ　（ツツジ科）

Rhododendron mucronulatum Turcz. var. ciliatum Nakai.

山地の急峻な岩場に生育する落葉広葉低木。花は3月。葉に先だって開き、花色は紅紫色。カラムラサキツツジの変種であるが、岡山県以西、九州北部、対島、済州島、朝鮮に分布する。前年の枝や葉に褐色の開出毛が多いことで母種と区別される。別府では六枚屏風の岩場にカラムサキツツジと共に生育している。

〈火山山頂〉

ミヤマキリシマ　（ツツジ科）

Rhododendron kiusianum Mak.

火山山頂部に生育する半常緑の低木。厳冬の風雪に耐え、6月のはじめ山頂一帯、花紅に染まる様はまことに見事である。花色に濃淡、紅紫の配色の違いがある。マイヅルソウやイワカガミなどと群落をつくるのは標高1,300m以上になるが、由布岳や鶴見岳ではさらに低いところでも群落が見られる。樹形が整っていて花が美しいことから盗掘が絶えず、正しい自然認識の啓発が望まれる。

顔なじみの植物たち

私たちの祖先は身近にある植物を活用して衣食住を支え、医療や工芸、文化など日常生活のあらゆるところで植物とかかわりをもってきた。その対象となった植物たちは特別なものではなく、道ばたや田畑、さらには、庭先などで顔なじみのものばかりである。

〈正月を祝うウラジロ〉

ウラジロ　（ウラジロ科）

Gleicheinia japonica Spr.

低地のアカマツ林内や常緑樹林の林縁に生育するシダ植物。土壌の浅いやや乾燥した場所に大群落をつくる。鏡モチの下に敷いたり、しめ飾りに添えて、長寿や子孫の繁栄を祝った。葉の縁にあるぎざぎざの鋸歯が年齢を意味しているという。隠山では平家の落武者がウラジロの葉に隠れて追手から逃れたといういい伝えがあり、"もろぶき"と呼んで正月でも採って用いないといわれている。城島では"もろむき"とよぶ。正月には、このほかに、ユズリハ、ナンテン、フクジュソウ、松竹梅などが登場する。

正月を祝うウラジロ

ヤブコウジ　（ヤブコウジ科）

Ardisia japonica Blume

低地のシイ林やカシ林の林床に生える丈の低い木本性植物。高さ10～20cmで冬に赤い実をつける。千両（センリョウ）万両（マンリョウ）ありどおし（アリドウシ）と植物名を連ねた瑞祥植物からははずれているものの、一番身近にある点ではひけをとらないのがヤブコウジである。マンリョウと同じヤブコウジ科に属し、濃い緑の葉陰に見えかくれする深紅の実はすてがたい。実の数が2～3個のためか、カラタチバナの百両に次ぐ十両の扱いを受けている。ところによってはヤマリンゴ・ヒメリンゴと呼ぶ地域もある。

〈春を呼ぶ植物〉

スギナ　（トクサ科）

Equisetum arvense L.

路傍や畑地に見られるシダ植物。3億年前の石炭紀に栄えたロボクという巨木が、スギナの祖先である。ロボクは高さ20m、幹の直経が40cmほどもあったという。この時代以後小型化をたどって現在の草本植物に至っている。葉の形がスギに似ていることから杉菜（スギナ）と呼ばれているようだ。子どものころ、母が「お杉だれの子、ほうしの子。ほうしだれの子、お杉の子」といっていたのを思い出す。この〝お杉〟とはスギナであり、〝ほうし〟とはツクシのことである。両者は地下でつながっていて、スギナは栄養茎、ツクシは胞子茎で生殖機能を営むのである。早春の日だまりにいち早く顔を出し春を呼ぶ植物である。別府にはトウナまたはトウナグサの方言がある。

セリ　（セリ科）

Oenanthe javanica DC.

水田やあぜに生育する多年草。地下茎がありその節から新芽を出してふえる。セリの名は新芽を出すころ、一面競（せ）り合うようにして生育するところからきているという。春の七草の一つで、最近は八百屋（やおや）の店先にも並べられ、なかには栽培品もあるが、独特の風味はやはり野生品には及ばない。七草がゆの行事は正月七日、野菜が不足しがちな時節に緑色野菜を食べて健康保持をはかり、あわせて、農耕の豊作を祈願することから始められたようだ。セリの食べ方としては、油いため、お浸し、あえもの、つけ物にするほか、すまし汁に入れて野趣あふれる香りを楽しむこともできる。

ナズナ　（アブラナ科）

Capsella bursa-pastoris Medik.

畑地や路傍に普通に見られる越年草。「よく見れば、なずな花咲く垣根かな」と芭蕉の句にもある。あまり目立たないが、日本各地どこにでもある植物である。これも、春の七草にかぞえられている。冬の間は葉を地面にはりつけたように広げて日光を受け、春になると茎を伸ばして先に白い花を咲かせてやがて三角形の実をつける。方言のペンペングサは実が三角形で三味線のバチに似ているところから、弾いた時の音を連想してつけたものである。湯山ではそのものずばりシャミセンバチと呼んでいる。英国では実が羊飼いが弁当を入れて歩く革袋に似ているので〝羊飼いの革袋〟とよぶそうである。

〈秋を告げる植物〉

ヒガンバナ　（ヒガンバナ科）

Lycoris radiata Herb.

彼岸に咲くヒガンバナ

あぜや土手などに生育する多年草。冬から春先までは濃緑色の葉をつけているが初夏には枯れて、秋の彼岸ごろに真紅の花を咲かせるので、この名がある。鱗茎（球根）をすりつぶして、よく水洗いし澱粉を取り糊を食用にしたが、リニコンやその他のアルカロイドを含んでいて有毒であり、気をつけないと中毒症状を起こす。詩歌の中に出てくるマンジュシャゲもこの植物の別名である。

墓地に多いことや毒を含んでいることから、別府ではシビトバナと呼んでいるところがある。生育地や分布状況から考えると、農耕文化と共に、渡来したようである。

ススキ　（イネ科）

Miscanthus sinensis Anderss.

草原や林縁に生育する多年草。特に火山性草原に群生して特有の景観をつくる。一名カヤとも呼ぶが屋根をふく刈屋からこの名が用いられるようになったという。今では、屋根をふくこともなくなり、炭俵の材料にも使われていたが、炭を使わなくなったこのごろでは、とりたてススキの利用も少なくなった。秋の七草（尾花となっている）にふさわしく、澄みきった青空になびくススキの穂は、躍動のあとのさわやかさを感じさせ、郷愁をそそる。

〈野趣を味わう〉

ウド　（ウコギ科）

Aralia cordata Thunb.

林縁や崩壊地に生育する多年草。図体ばかり大きくて役立たない人に向けて、ウドの大木という悪口をいう。ウドは草であるから、大きく成長しても木として使えないからと思っている人が多いが、ウドとはウツロの意味で、本来は木の中心部が腐って使用できなくなった大木を指している。新芽がでて、あまり大きくならない時に茎をねじるようにして取り、水洗いして酢みそで生食す

ると独特の風味を味わえる。地下茎を残すように取るのがこつで、こうしておけば同じ場所で手に入れることができる。よく似たものにシシウド、ハナウドがあるがこれは食用にはならない。根に近い葉を茎からもぎとるとき、葉柄のつけ根の形が鹿の角を連想させるところから、各地でシカと呼ばれ、湯山にもこの方言がある。

土の香を味うウド

フキ　（キク科）

Petasites japonicus Maxim.

林縁のやや湿ったところに生育する多年草。春一番の吹き荒れたあと、里山の林縁やあぜなどに若草色の固くしまったつぼみが顔を出す。これが"フキのとう"で、山菜として賞味されている。フキのとうに限らず山菜は新鮮であることが重要で、つぼみが開き"とう"がたって花の集まりが見えるようになってはまずい。フキの葉柄は、皮をむいて、しょう油味で煮てもおいしい。海岸近くの林縁で葉が厚く光沢のあるフキはツワブキで別種である。自生するものをヤマブキとかノブキと呼ぶ地方があるが同名で別の植物があるので、フキと呼ぶのが正しい。

クズ　（マメ科）

Pueraria lobata Ohwi

荒地や林縁に群生する落葉つる植物。秋の七草の一つで、夏の終るころから房状の紅紫色の花をつける。葛湯に用いる澱粉はこのクズを根をつぶして水に浸して取り出したものが風味も消化もよいとされている。しかし、純粋なものは高価であり、ジャガイモの澱粉で代用されることが多い。また、昔、茎をよく煮て水に浸し繊維をとって、葛布を織っていたという。水に強く雨衣としたり袴やかみしもなどに用いられていた。方言にカンネまたはカンネカズラがある。

〈薬用に用いられて〉

ドクダミ　（ドクダミ科）

Houttuynia cordata Thunb.

日陰の荒地や林縁、庭先に生育する多年草で熱帯から暖帯まで世界に広く分布する。高さ20～30cmに成長し、初夏のころ、ひときわ目立った白い十字の花をつける。花びらのように見える白十字は花全体を包む包葉と呼ばれる部分で、花びらではない。注意して見ると中央部に小さく集まった花がある。この花は花びらが退化していて、めしべとおしべからできている。全体に独特の臭気があるが、薬草としての利用価値は高く、腰痛、利尿、下痢として用いるほか、生薬をもんではれものに張ると吸い出しの効能があるとされている。別府ではジャグサ、シビトグサと呼ぶ地域がある。

"じゃぐさ"とよばれるドクダミ

ゲンノショウコ　（フウロソウ科）

Geranium thunbergii Sieb. et Zucc.

路傍に普通に見かける多年草。センブリと共に腹痛の民間薬として有名である。子どものころ、腹いたを起こし特有な臭いに鼻をつまんで飲み、やたら苦かったのを記憶している。1日3回も飲めば少々の腹痛は治る。さに"現の証拠"である。花は小さいが鮮かな桃色をしていて、炎天下によく目立つ。薬効も土用の丑の日に採取したものがことのほかよいとされている。

〈遊びの草々〉

スズメノテッポウ　（イネ科）

Alopecurus aequalis Sobol. var. amurensis Ohwi

裏作をしていない休耕水田に群生する越年草。北半球の温帯に広く分布し、農耕文化と共に日本に渡来したものであろう。春の初めごろ、高さ30cmほどの茎の上部に穂状の花をつける。橙黄色に見えるのはおしべである。子どものころ、穂の出はじめた茎を選び、穂を抜きとって、残った葉を曲げ、ピーピーと草笛を鳴らした思い出がある。ヤハズエンドウ（以前はカラスノエンドウとい

っていた)と共に草笛の材料であった。天間や、枝郷ではピーピーグサと呼んでいる。

オオバコ　（オオバコ科）

Plantago asiatica L.

道ばたや空地の踏みつけ地に生育する多年草。大きな葉をつけることから大葉子（オオバコ）の名があるという。中国では牛馬車の通路となると生育をはじめるので“車前草”の名があり、アメリカではセイヨウオオバコを“白人の足”と呼んでいる。未開地に白人が足を踏み入れると、生育しはじめるところからこの名がつけられたものと思う。人の行かない所にはないのであるから、まさに身近な植物である。地面から直立する花茎は強い繊維があり、この茎をからませて引きあい「すもう遊び」をする。たくさんある花茎の中から強そうに見えるものを選んで挑戦したものである。同じ仲間で、帰化植物のヘラオオバコやタチオオバコをあちこちに見かけるようになった。

カラスウリ　（ウリ科）

Trichosanthes cucumeroides Maxim.

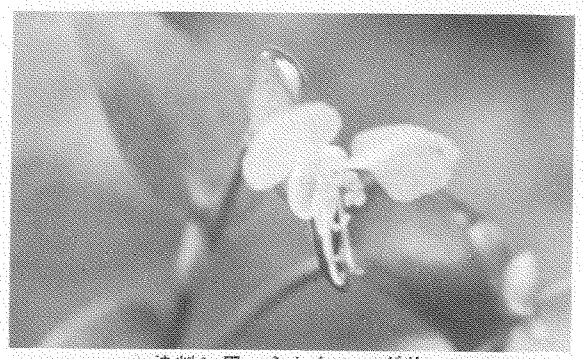
路傍や林縁に生育するつる性の草本植物。秋が深まり枯れた葉が落ち始めると、カラスウリの赤い実がひときは目を引く。実はよく目につくが、花は夏の終りごろ夕方から咲き始めて、翌朝にはしおれるために見のがしていることが多い。つぼみは７～８㎜であるが宵闇（よいやみ）の中でレース糸のように広がってゆく白い花弁が全開するころには、その大きさがつぼみの約10倍にもなるのであるから、まさに感嘆の芸である。カラスウリの名はカラスがついばむことによるというが、カラスだけがついばむというものでもないようだ。学校の帰り道で実の中の黒い種子をとり出し、恵比寿さんと大黒さんに見たて大切に持ち歩いた記憶がある。子どもにとっては宝物だったのである。別府ではカラスコベやクソゴオリといった方言がある。

〈染物として〉

ツユグサ　（ツユクサ科）

Commelina communis L.

路傍や畑地に生育する１年草。６月から10月にかけて茎の上部に青色の花をつける。花がまだ露を帯びた早朝に開いて、午後にしぼむので露草の名がある。花弁は古くから染料として用いられたが、染めた布を水に浸したり、日光にあてるとやがて褪色することから今でも友禅や絞り染の下絵書きに用いられている。ツユグサは万葉の時代から染物に用いられ、アカネやアイなどと共にファッションを生み出す大切な植物のひとつだったと思われる。方言でハナガラと呼ぶところが多い。

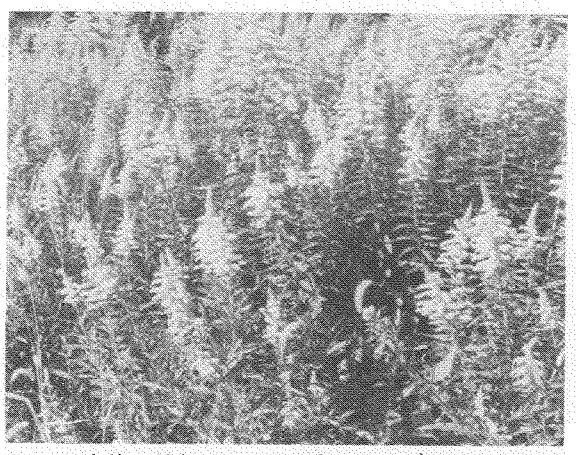


染料に用いられたツユグサ

新メンバーの植物たち(帰化植物)

近年、埋土や住宅地の造成、新しい道路の開設などで裸地を緑化するとき、外国産の植物が用いられることが多い。そのとき、栽植されたものが逸出し、野生化することがしばしばある。街や郊外を歩いているとき、思わぬ所で、外来種の植物を発見する。

別府市誌（昭和60年版）の資料編「別府市植物目録」によると、別府市内の野生植物は1,529種(変種を含む)で、そのうち外来種の逸出、帰化したものが111種、全体の7.3％にあたる。この中には、ジュズダマやオオイヌノフグリ、ヒメジョオンなどのように路傍や畑地、空地など、いたる所でみられ、分布の量が大きいものもあれば、イチビやサンシチソウなどのように、一時的には帰化したものの、生育地の空地が宅地などに変ったために消滅してしまったものもある。ここでは、最近、新しいメンバーとなって加わったものや分布域が限られているものなどをとりあげてみた。



晩秋に咲きほこるセイタカアワダチソウ

コンテリクラマゴケ　（イワヒバ科）
Selaginella uncinata Spring

冬にも枯れない常緑性のシダ植物。茎は長く地上をはい、長さ50cm以上にも達する。葉の表面は、紺色の光沢がある。"コンテリ（紺照）"と呼ばれる由えんである。人家の暗い庭や床下などにも生え、周りの景色を反射して異様にみえる。市街地で、栽培したものが人家近くの垣根や路傍に逸出し、野生状になっていることがある。中国原産。

オニウシノケグサ　（イネ科）
Festaca arundinacea Schreb.

多年生の大型イネ科植物。草丈40～180cm。欧州原産。牧草学では、トール・フェクスと呼ばれる。戦後、砂防用として、造成地や堤の土手、道路の法面や裸地の緑化に用いられ、逸出して道ばたのいたる所に生い茂っている。在来種をおさえて野生化するので、草原の自然景観を大切にする奥別府の草原地域では、その使用には慎重であって欲しい。道路などの緑化に用いられて野生化しているものに、シナダレスズメガヤ Eragrostis curvula Nees（南アフリカ原産。ウィーピング・ラブグラスの名がある）、ハガハグサ Poa pratensis L.（欧州原産。牧草学ではケンタッキー・ブルーグラスとよぶ）などがある。

ネズミホソムギ　（イネ科）
Loliam hybridum Hausskn.

最近、路傍や荒地のいたる所にみられるイネ科植物。これは、欧州原産のホソムギ L. perenne L. と ネズミムギ L. multiflorum Lam. の間種とされている。花穂が出て小穂をみると、ホソムギには毛のようなノギがないのが普通であり、ネズミムギは小穂も大きく、長さ1cmほどのノギが出る。間種とされるネズミホソムギは小穂の大きさも中間で、5～7cmのノギをもっている。路傍に野生化しているものは、ネズミホソムギのほうが多い。最近、飼料として人工草地に植えられたものが逸出したものである。

ホテイアオイ　（ミズアオイ科）
Eichhornia crassipes Solms-Laub.

熱帯アメリカ原産の水草。今では世界中の熱帯地に広がっており、先年、中国の桂林を訪れたとき、堀に群生しているのを見た。別府市内では、カワアナゴが生育している亀川の温水池に群生している。池には温泉水が流入するため冬季の水温も20℃を下がらず、寒さに弱いホテイアオイも容易に越冬できる。夏季には生育がよすぎて繁茂し、その処理に困るほどであるという。葉柄の基部は円くふくらみ、水に浮く。ヒヤシンスに似た花穂を出し、淡紫色花をつける。

シャクチリソバ　（タデ科）
Fagopyrum cymosum Meisn.

草丈1mにも達する多年草。インド北部ー中国原産。別名ヒマラヤソバともよぶ。根茎は塊状、茎を束生する。葉は三角形。秋に花穂を出して白色花をつける。数年前、大分市の埋立地で野生しているのを見たが、1983年（昭和58年）に鶴見町新別府病院の横内でも群生しているのを確認した。ごく最近に野生化したものであろう。

ヒメマツバボタン　（スベリヒユ科）
Portulaca pilosa L.

多肉性の1年草。熱帯アメリカ原産。マツバボタンよりずっと花は小さく目立たない。近年、別府市内のあちこちの道ばたや日あたりのよい庭先などに見られるようになった。茎はよく枝分かれして地をはう。長さ10～30cm。多肉のこん棒状の葉をつける。基部にちぢれた白毛がある。茎の先に葉が輪生状につき、数個の花を抱く。花は径9cm、5花弁、紫紅色。花期は夏。

マンテマ　（ナデシコ科）
Silene gallica L. var. quinquevulnera Koch.

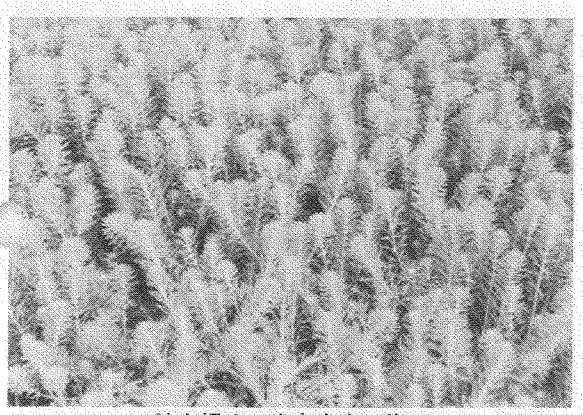
野口墓地や関の江海岸などの砂地に生えている欧州原産の帰化植物。全株にあらい毛を開出し、腺毛も混生する。草丈30～50cm。花は枝先に同じ向きに並んで穂状につき、白色の縁どりのある濃赤色の花を咲かす。弘化年間の渡来といわれているが、県内でも各地の海岸や墓地などでみられる。別府市街地のものは、戦前より生育しているもののようである。

コマツヨイグサ　（アカバナ科）
Oenothera laciniata Hill

北米原産の帰化植物。1～2年草。別府市内では戦後に急激に広がったもようである。特に海岸や河原、埋立地などの砂地によく生育している。草丈20～60cm、よく枝を分け、地をはうように斜上する。葉は切れこみがあるが形はさまざまである。花弁は4。花の径は2～3cm。淡黄色。夕方に咲く。しぼむと黄花色に変わる。この仲間には別府市内では、オオマツヨイグサ O. erythrosepala アレチマツヨイグサ O. biennis マツヨイグサ O. stricta の3種がみられる。いずれも帰化植物である。

オオフサモ　（アリノトウグサ科）
Myriophyllum brasiliense Camb

最近、河川や池などにみられるようになった水生の帰化植物。南米ブラジル原産。多年草で、水中に枝を分けて、はうようにして広がり、1mにも達する。茎には多くの節があり、水上茎を出し、水面をおおってしまう。葉は羽状葉を輪生する。繁殖力が強く、根や茎で沼や池などを陸化してしまうことがある。市内では、海地獄の池に繁殖し、厄介な害草となっている。



池を埋めつくすオオフサモ

マメアサガオ　（ヒルガオ科）

Ipomoea lacunosa L.

北米原産の帰化植物。つる性の1年草。アサガオに似ているが、葉は長卵形のものが多く、ときには3裂するものもある。花は小さく、上からみると五角形。径2cm内外で小さい。ふつうは白色。照波園町、上人ヶ浜町などの路傍にみられる。花の色が淡紅色を帯びるものをベニバナマメアサガオといい、原町の空地に生育している。

道ばたに咲くマメアサガオ

フラサバソウ　（ゴマノハグサ科）

Veronica hederaefolia L.

欧州原産の帰化植物。2年草。茎は、はって広がる。長さ10～20cm。葉は互生、花は葉腋ごとにつける。淡青紫色。花の大きさ4～5mm。日出町の路傍や畑地などにはよくみかけるが、市内では、照波園町などに点在しているにすぎない。同じ仲間のオオイヌノフグリ V. persica（西アジア原産）、タチイヌノフグリ V. auvensis（欧亜大陸～アフリカ原産）は、早くから道ばたや畑地などに生えている帰化植物である。

ツボミオオバコ　（オオバコ科）

Plantago virginica L.

北米原産の帰化植物。1～2年草。全草ビロード状の白毛におおわれる。葉が立っているのでタチオオバコともよばれる。別府市内では、1965年（昭和40年）ごろに鶴見地獄の草地で発見した。その後、旗の台、豊泉荘、鶴見園跡地などでもみつかり、市内の各地に散在している。これとは別に、高原の牧草地や路傍などに、全体が大型で、花茎が50～70cmにも及ぶヘラオオバコ P. lanceolata（欧州原産）が帰化している。

キキョウソウ　（キキョウ科）

Specularia perfoliata A. DC.

北米原産の帰化植物。1年草。草丈30～80cm。茎は立って、心臓形の葉を抱き、互生してつく。花は初夏、葉腋ごとにキキョウに似た鮮やかな紫色の美花をつける。下方から上方に咲かしていく。別府市内では、戦後、米軍のキャンプ地（現天皇陛下御在位50年記念公園）を中心として広がったもようで、現在では、市街地の各所の路傍や空地でみられる。キキョウソウに比べ、全体が細く、葉が茎を抱かないで、花も小さく目立たないヒナキキョウソウ S. biflora（北米原産）が、1984年、鶴見園跡地でみつかっている。

ブタクサ　（キク科）

Ambrosia artemisiaefolia L. var. elatior Desc.

花粉病の主因として知られている北米原産の帰化植物。1年草。全草に軟毛があり、草丈30～100cmとなる。枝先に細長い穂を作り、雄の頭花を並べてつけ、花粉をまき散らす。雌花はもとのほうの包葉にできる。別府市内では、1960年ごろ、上人ヶ浜の埋立地にみられたが数年で消滅している。その後、上原町や青山中学校の構内にも数年生育していたが、最近姿を消してしまった。この地方では、セ

帰化しては消えるブタクサ

イカタアワダチソウやオオアレチノギクのように旺盛に繁殖できないようである。この仲間のオオブタクサ A. trifida（北米原産）も花粉病を起こすとされている。市内では、東荘園町の空地にかなり長年月生育している。

セイタカアワダチソウ　（キク科）
Solidago altissima L.

害草とされて一躍有名になった北米原産の帰化植物。花粉公害の原因とされたが、あながちそうではないらしい。多年草で、繁殖力はきわめて旺盛、数年も経つと、土地をひとり占めしてしまう。しかも、草々が枯れてしまう晩秋のころ黄花を高く咲きそろえるので目立つ。土地管理がゆき届かない人間の怠情の所産といってよいだろう。花は養蜂業者の蜜源になる。

ハルジョオン（キク科）
Erigeron philadelphicus L.

北米原産の帰化植物。数年前から別府市内のあちこちでみかけるようになった。最初は、1980年、ロープウェー下駅の広場草地でみつかった。1984年、温泉プールの緑地、吉弘町（現緑丘町）の路傍に生えているのを確認。東山城島では高原草とよばれているヒメジョオン E. annuus Pers.（北米原産の帰化植物）によく似ているが茎は中空、根生葉は花時まで残り、花序は茎とともに下向きにうなだれるので区別できる。市内にみとめられるものは淡紅色花。花期もヒメジョオンより早く春～初夏。

花茎がうなだれるハルジョオン

ブタナ　（キク科）
Hypochoeris radicata L.

欧州原産の帰化植物。黄花でタンポポによく似ている。多年草。葉はすべて根生で、両面に黄かっ色の硬い毛を密生する。花茎を出し、枝わかれして頭花をつける。宅地造成地や路傍などに生えるが、市内では、天間高原といわれるサファリー入口の道路一帯や別府霊園の草地に生育している。

セイヨウタンポポ　（キク科）
Taraxacum officinale Weber

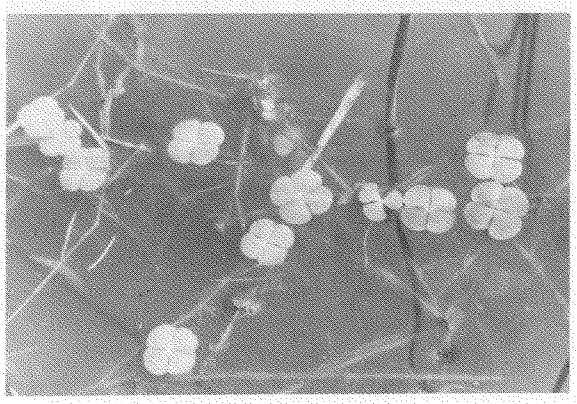
欧州原産。多年草。黄花。市街地のいたる所で繁殖しているタンポポで、アスファルトの割れ目などでも根も下して生育している。人里近くにみられた在来種のタンポポは、シロバナタンポポ T. albidum で、今でも郊外の畦や土手などでみかけられる。セイヨウタンポポは、花をつつんでいる総苞が、つぼみのときから下方にそり返っているので在来種のタンポポと区別することができる。最近、セイヨウタンポポに混じって、果実が赤味を帯びたアカミタンポポ T. laevigatum がみられるようになった。1984年に、ケーブル下駅一帯の上原町、原町の路傍、亀川浜田町などの空地に生えているのを確認した。

姿を消した植物たち

別府の扇状地や海岸は、戦後急激に変貌していった。特に昭和40～50年は土地の改変は著しかった。海岸は埋立され、築港は進んで、自然海域は極度に狭められた。市街地の水田、畑地、雑木林は造成されて住宅地に変っていった。このために、消滅してしまった植物も少なくない。

デンジソウ　（デンジソウ科）
Marsilea quadrifolia L.

水田や池沼に生える夏緑性のシダ植物。根茎は細く、長く泥の中をはう。葉柄は10～15cm、先に4枚の小葉が十文字状につき、水面に浮く。四つ葉のクローバーを水に浮かべた様である。南石垣や吉弘の海岸よりの、日線の線路にそって帯状に湿地があり、ヨシやヤナギの類が生えて、周辺には水田が作られていた。1970年ごろま


消えゆくデンジソウ

で国際観光港上の線路の西側の水溝にデンジソウの生育を確認している。一帯が整地され、市街地となって消滅してしまった。

オオイワヒトデ　（ウラボシ科）
Colysis pothifolia Pr.

常緑性のシダ植物。根茎は太く径1㎝に達する。葉柄は太く、長さ20～60㎝、葉身は80㎝に達する。羽片は7～15対、辺縁は切りこみがない。県内では、主として日豊海岸の林内に生え、別府市では南石垣の鶴見丘高校付近の谷に発達した林内に生育し、この地が本県における北限地とされていた。一帯の道路や都市区画の整備事業の推進に伴って谷も林もなくなり消滅してしまった。

マルバオモダカ　（オモダカ科）
Caldesia reniformis Makino

池沼に生える1年草。葉はすべて根生で、円心形。花茎は、3枚を輪生し、枝は数個の花柄を輪生する。神楽女池の南岸に自生していたが、池の下方を築堤したため水位が上昇することが続き、消滅してしまった。県内で、この地のほかの自生地はまだみつかっていない。

ミズオオバコ　（トチカガミ科）
Ottelia alismoides Komar

水田や池に生える1年草。葉はやはらかく水中に斜上する。オオバコの葉に似ている。8～10月、花茎を出して、上端に3弁の白花をつける。子房はふくれ、縮れた縦ひだがある。水田に除草剤を使用するようになって姿を消してしまったもようである。昭和40年ごろには、亀川の平田や南石垣の水田にふつうに生育していた。

トラノハナヒゲ　（カヤツリグサ科）
Rhynchospora brownii Roem. et Schult.

そう生して小さい株をつくる多年草。湿地に生える。花穂は8～10月に出し、花序は2～3個。市内上人ヶ浜の国道10号線と日豊線の線路との間のハシノキ林の南側一帯に湧水池があって、トラノハナヒゲやカモノハシ、マアザミなどが生える陽湿地が発達していた。昭和45年ごろ国道の拡幅工事や埋立などのため湿地がなくなり姿を消してしまった。県内には、この地のほかにトラノハナヒゲの生育地は確認できていない。

シズイ　（カヤツリグサ科）
Scirpus nipponicus Makino

沼や池に生える多年草。地下に細い走出枝を出し、先端に小さい塊茎をつくる。草丈40～90㎝。夏に花穂を出して、5～9個の小穂をつける。九州では少なく、四国、本州、北海道、朝鮮、ウスリー地方の北国の水湿地に生える。県内では、湯布院町の小田野池及び市内神楽池に生育していたが、神楽女池のものは、築堤したため水位に変化が生じ、消滅してしまった。

サギソウ　（ラン科）
Habenaria radiata Spreng.

日当りのよい湿地に生える多年草。地下にだ円形の球茎がある。花茎の高さ15～40㎝。茎の下部に数葉をつけ、7月末から8月に、茎の先のほうに1～2個の花をつける。白花でシラサギが羽を広げて飛んでいる様を思わせる。別府市内では、神楽女池の北側湿地に生育していたが、下方築堤のため湿地が水没し消滅してしまった。猪の瀬戸湿原にも生育しているというが確認できていない。

神楽女池で消えたサギソウ

ハママツナ　（アカザ科）
Suaeda maritima Dumort.

海岸の塩湿地に生える1年草。無毛。草丈15～35㎝。茎はよく分枝し、肉質の棒状の葉を互生する。初め緑色であるが、後には赤紫色となって美しい。関の江海岸の昭和35年ごろまでは、温水地までの水路や冷川が入江をつくり、入江状の塩湿地があって、それに、ハママツナやホソバノハマアカザ Atriplex gmelinii C. A. Mey.（アカザ科）、アイアシ Phacelurus latifolius Ohwi（イネ科）などが群落をつくっていたが、築港され、埋立てられて往時の面影を全く失ってしまっている。

タコノアシ　（ベンケイソウ科）
Penthorum chinense Pursh

湿地や水沢地に生える多年草。茎の先にタコノアシの

ように数個の枝を出して多数の小さな花を片側だけにつける。県内では、所々の水沢地にみかけるが、別府市内では、温水(ぬくみ)の水沢地の標本がある。水溝の補修工事で姿を消したものであろう。現在、一帯をくまなく探がしてみるのだがみつからない。

ハマナタマメ　（マメ科）
Canavalia lineata DC.

海岸の砂地や崖地に生えるつる性の多年草。葉はクズに似ているが、毛がほとんどなく、革質でつやがある。花は6～8月、淡紅紫色。果実は、ナタマメに似て大きい。佐賀関半島や日豊海岸では、よく繁茂して花を咲かせ、実を結ぶ。別府湾内では、ときたま果実が砂浜に打上げられて発芽し、つるを伸ばしていることがある。昭和35年ごろ、餅ヶ浜の海岸及び関の江海岸の砂浜で生育しているのを確認している。別府の自然海岸はほとんどなくなってしまった。ハマナタマメが漂着して茂ることはもうあるまい。

ハマボウ　（アオイ科）
Hibiscus hamabo Sieb. et Zucc.

海岸の泥土に生える落葉低木。小枝や葉に多くの星状の圧毛を密生する。葉は円い。花は7～8月、径約5㎝、黄色で心部が暗赤色のムクゲに似た美花を咲かす。上人ヶ浜の海岸林にハマボウのかなりの大樹が1本あり、梢いっぱい花をつけていたが、昭和40年ごろ、枯死してしまった。開花したハマボウのカラースライドが今では大事な証拠となっている。

ハマサジ　（イソマツ科）
Limonium tetragonum A. A. Bull.

海岸の塩湿地に生える越年草。葉は根生し、無毛で厚い。枝分かれした花茎を出し、黄色を帯びた小さい花をたくさんつける。昭和35年ごろまで春木川から餅ヶ浜までの海岸に生えていた。

タヌキモ　（タヌキモ科）
Utricularia japonica Makino

池沼を浮遊する多年草。葉に捕虫胞をつける食虫植物。葉は細く糸のようになって羽状にひろがる。花は水中の茎から花茎を出して、数個の黄花を咲かす。別府市内では、湯山殿の古い池に生育していたが、現在、人工池となり、鯉を飼育していて、自然状況を失ってしまっている。多分、タヌキモは消滅してしまったものと思われる。

ヒゴシオン　（キク科）
Aster maackii Regel

山地の湿地に生える多年草。草丈40～80㎝、葉は少しざらつく。花期は8月から10月。紫色の美花を咲かす。朝鮮、中国東北部、ダフリカなど大陸に広く分布域をもつ植物であるが、日本では、九州だけに産し、熊本県の阿蘇地方の湿地、大分県では、湯布院町の小田野池、九重町の長者原、上津江村の湿地に生えている。京都大学理学部の標本室には、陶山淳一氏が志高湖で採集した1938年（昭和13年）の標本がある。そのころまでには、ヒゴシオンが志高湖畔に花咲かせていたのであろう。

かつて志高湖で咲きほこっていたヒゴシオン

ハマグルマ　（キク科）
Wedelia prostrata Hemsl.

海岸の砂地に生える多年草。茎は長く地をはい、節から根をおろす。葉は長だ円形で、短い剛毛があってざらつき、ネコノシタともよばれる。花期は夏～秋。黄花を咲かす。関の江海岸の砂丘上に群生していたが、砂丘がならしたり、土砂を入れて埋めたりしたため、多くの砂浜植物とともに姿を消してしまった。

（荒金正憲・小田　毅）

べっぷの文化財
―― 第17号 ――
発　行　昭和61年2月
発行所　別府市教育委員会
　　別府市文化財調査員会